

日本『詩經』図譜初探

原田 信

はじめに

中国古代の歌謡を集めた『詩經』は孔子が編纂したとされ、後に儒家經典の一つとなった。そこで、歴代の学者は篇章の構成や字義、各詩に詠まれた制度、習俗、器物、動植物など、様々な角度から『詩經』を読み解こうと試み、これらの事物に関する文字注釈や図譜を作成して自らの見解を示した¹。また、初学者が解釈の要点や事物の様子を容易に理解できるよう、文字注釈や図譜を附した種々の『詩經』テキストも、学者や書肆によって編纂された。このように、『詩經』図譜（以下、適宜「図譜」と略す）は文字注釈とともに『詩經』の解釈、理解を目的として作成、参照されたことから、『詩經』解釈史の一端をなす資料だと言えよう（図1）。

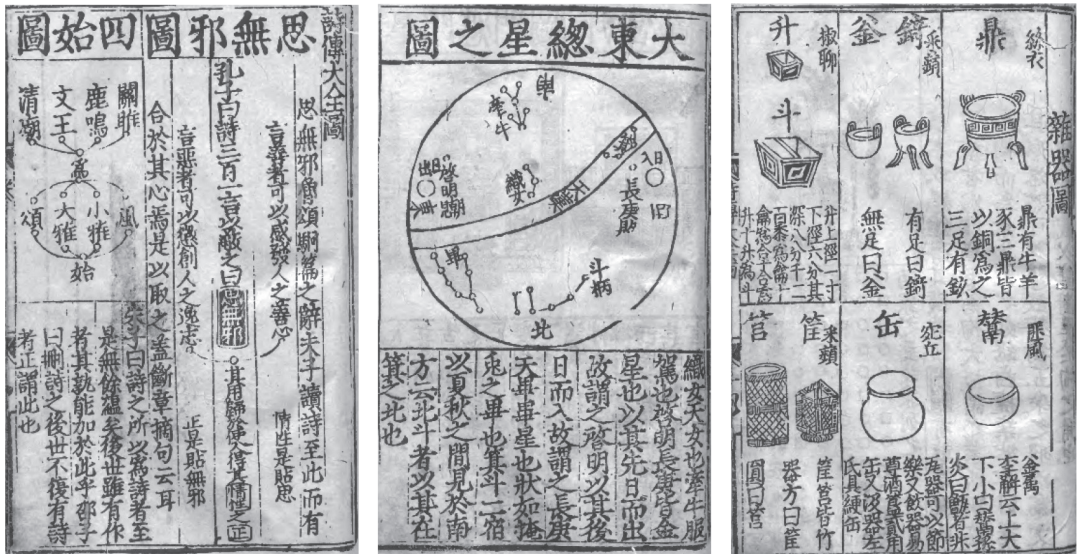


図1. 中国の『詩經』図譜の一例

(林羅山旧蔵・明成化乙酉羅氏勤有堂刊『詩經大全』の「詩經大全図」²)

しかし、「図譜」の内容や編纂意図、そして『詩經』を解釈する上で「図譜」が担った役割は、これまであまり着目されなかった。近年、「図譜」を取り上げた研究が散見され

るようになったが、中国の「図譜」についていえば、その概要を紹介したり、「図譜」の研究意義を論じたりする研究が多くを占めており、歴代の「図譜」の全容を通時的に考察した研究はなかった³。

筆者が調査したところ、中国では漢代から中華民国初頭まで約八十六種の「図譜」が編纂され、そのうち宋代以降の五十八種は現存していた。この五十八種の大部分は、南宋中期に『詩経』学習の補助資料や科挙参考書の附録として編纂された、王侯の家系や六義、正変等の一覧表、及び天文地理、建築、兵制、衣冠、祭器等の図を収録する「図譜」を原型としており、時々には多少の改編が加えられたとはいえ、中華民国に至るまでの約七百年間、類似した「図譜」が一貫して編纂され続けた⁴。

一方、日本でも江戸時代以降、複数の「図譜」が編纂された(図2)。これらの「図譜」に日本独自の特徴があるのか、この点は日本における『詩経』解釈史の展開を明らかにする上で、検討に値する問題だと考えられる。日本の「図譜」については、新井白石『詩経図』や淵在寛『陸氏鳥獸草木虫魚疏図』、岡元鳳『毛詩品物図攷』、馬場克昌『詩経物産図譜』の四種各々の概要や特徴がすでに紹介されているほか、特に『毛詩品物図攷』に関しては清代末期に中国で翻刻されたことから、その流伝や、中国の「図譜」と比較した論考がある⁵。しかし、日本で編纂された「図譜」の伝存状況や、「図譜」全体を通じて見られる編纂、内容上の特徴は未だ論じられていない。そこで、本稿では日本の「図譜」の編者や内容に関する概要を整理し、そこから垣間見える全体的な特色をあわせて記した。



図2. 日本の『詩経』図譜の一例
(土井聲牙旧蔵・岡元鳳『毛詩品物図攷』⁶)

一、日本『詩経』図譜の概要

筆者が調査し得た「図譜」のなかでも、早期に日本へ伝来したと推測されるのは元刊

『詩集伝』の附録「詩図」（足利学校蔵）である。同書には如道（一二五三～一三四〇）が寄進したと記されており、遅くとも鎌倉時代から室町時代までには日本へ伝来したらしい。その後、伝来時期は不明ながら、宮内庁書陵部の蔵書に明の勅撰本『詩経大全』の附録「詩経大全図」の永楽刊本があり、林羅山（一五八三～一六五七）旧蔵書には同書の成化刊本があることから、次第に明代の「図譜」が伝来した状況がうかがわれる。

一方、日本人が編纂した早期の「図譜」は元禄七年（一六九四）、新井白石の『詩経図』である。その後、江戸時代から明治時代初頭まで、少なくとも十五種の「図譜」が日本人の手により編纂された⁷。

日本において編纂された『詩経』図譜一覧

	編纂年代	書名	編纂者	版本種別
1	元禄七年 (一六九四)	『詩経図』	新井白石	彩色稿本
2	享保二年 (一七一七)	『頭書図解改正詩経』	尾田玄古	刻本
3	安永八年 (一七七九)	『陸氏鳥獸草木虫魚疏図』	淵在寛	刻本
4	天明四年 (一七八四)	『毛詩品物図攷』	岡元鳳	刻本
5	寛政三年 (一七九一)	『詩経図彙』	松本愚山	刻本
6	寛政六年 (一七九四)	『詩経名物図』	田辺楽斎	稿本
7	嘉永三年 (一八五〇)	『詩経名物図解』	細井東陽	彩色稿本
8	安政三年 (一八五七)	『詩経物産図譜』	馬場克昌	彩色稿本
9	明治十六年 (一八八三)	『鼈頭図彙標註詩経字 類大全』	佐野元恭	銅版本
10	明治十九年 (一八八六)	『標註図彙詩経字解大全』	三尾重定	銅版本
11	不明	『詩経小戎図考』	积仏誉	写本
12	不明	『詩経国風図』 『詩経小雅図』	皆川淇園 (一七三五～一八〇七)	稿本
13	不明	『小戎図考』	安積良斎 (一七九一～一八六一)	稿本

14	不明 (一七九一年以後)	『詩経図説』	不明	彩色稿本
15	不明 (一八一一年以後)	『詩経虫図説』	不明	彩色稿本

これら十五種の「図譜」の編者と内容に関する概要は以下の通りである。

1. 『詩経図』

『詩経図』五冊、『詩経図総目』一冊、紅葉山文庫の旧蔵書⁸。本書は稿本であり、『詩経』に見える天文、動植物、楽器、祭器、兵器、農具、建築などの彩色図三八〇図を収録している。書中、編者や成書年代に関する記載は一切ないが、幕府の御書物方の蔵書目録『元治増補御書物目録』には、新井白石（一六五七～一七二五）が編纂し、狩野春湖が図を描いたとある⁹。

『詩経図』の編纂経緯は、白石の日記や書簡等に散見される¹⁰。これによると、元禄六年（一六九三）の末、白石は木下順庵の推挙により甲府藩主徳川綱豊（後の徳川家宣）の侍講となり、『詩経』の講義を命ぜられた。講義が始まって間もなく、綱豊は白石を召し出して『詩経』に見える事物の図を作成するよう命じた。白石は内心、君子たる人物が名物学に時間を費やすことに反対していたようだが、主命を断れず『詩経図』の編纂を開始した。白石は中国から伝わった『宣和博古図』や『周礼図』等に依拠して、甲府藩の御抱え絵師狩野春湖に図を描かせた。一方、動植物の考証は木下順庵を通じて本草学者の稲生若水の助力を得た。若水は日中の動植物の標本や写生図とともに、動植物の特徴や和名といった考証結果を白石に提供した。

『詩経図』は元禄七年十一月一日に完成した。しかし、その翌年、徳川綱豊は『詩経図』をさらに校正して清書するよう白石に命じ、『詩経図』を託した。白石はこの作業を進めると同時に、再び稲生若水に『詩経』中の動植物を考証するよう依頼した。若水はこの求めに応じて宝永六年（一七〇九）、『詩経小識』を著した。

現在伝わる『詩経図』が完成当初のものか、それとも白石が改めて校正し『詩経小識』の考証を反映したものか明らかではない。少なくとも現在伝わる『詩経図』の天文、器物、建築等の図の大部分は、『宣和博古図』のほか、明の『三才図会』や『農政全書』、中村惕斎『訓蒙図彙』等からの引き写しである。これに対して動植物図は、「蛇」や「象」など、一部に『三才図会』や『訓蒙図彙』に類似した図があるものの、多くの図は他書に見えず、白石が稲生若水の考証によって独自に作成したと推測される¹¹。

2. 『詩経図解』

『詩経図解』は『五経図解』の一卷、尾田玄古の撰。本書は刻本であり、巻末には享保二年（一七一七）越後屋治兵衛の刊記がある¹²。尾田玄古（一七一五年没）は本名を馬場信武といい、京都の人、照光院門跡道尊法親王に仕えた後、医術や著述を生業とした。尾田玄古は多才な人物だったようで、その著述活動は易学、音韻、占卜、天文、兵法、医学、絵画、通俗文学等の領域に及び、『易学啓蒙図説』、『関帝靈籤占』、『諸葛孔明占法俚諺抄』、『初学擲錢抄』、『画典良材』、『通俗続後三国志』など三十種余りの書物を著した¹³。

本書は巻首の「十五国風地理之図」が一葉を占める以外、全書を通じて上図下文の体裁をとっており、本文に朱熹『詩集伝』を載せ、その上部に『詩集伝』から節録した音韻、語義に関する注釈、そして動植物、天文、地形、衣冠、祭器、兵器、生活用具等の図三一八図を附している。図の多くは『三才図会』の引き写しであり、「日居月諸迭微図」や「蝮蝮図」など一部に『訓蒙図彙』の図が見える。

図を附した『詩集伝』は中国で多く見られ、初学者向けの学習テキストとして、元代から民国初期まで盛んに刊刻された。『詩経図解』もその内容や体裁からして、初学者向けの学習テキストであろう。

3. 『陸氏鳥獸草木虫魚疏図』

『陸氏鳥獸草木虫魚疏図』四巻、附録一卷、淵在寛の撰。本書は刻本であり、巻首には安永七年（一七七八）初秋の自序、巻末には安永八年の東都（江戸）書肆須原屋茂兵衛及び京都北村四郎兵衛の刊記がある¹⁴。淵在寛の経歴は、自序に江戸の人だと記されている以外、明らかではない。一方、編纂の意図と経緯については自序に記載がある。これによると、淵在寛は日本に『詩経』の名物を論じる学者が少ないことから、唐の陸璣『毛詩鳥獸草木虫魚疏』に、明の毛晋『毛詩鳥獸草木虫魚疏広要』の説と本草書の記載、そして図と和文の解説を注釈として附すことで、初学者が容易に理解できるようにしたという¹⁵。

『陸氏鳥獸草木虫魚疏図』巻一から巻四までは『毛詩鳥獸草木虫魚疏』の篇目に従い動植物図一九三図を収録しており、附録には楽器、祭器、兵器、生活用具、天文等を描いた九十九図が収録されている。これらの図は、和文注釈の中に『三才図会』や「詩経大全図」、「本草図」といった出典を明示している箇所がある。また、諸家の説として示す引用文から、淵在寛は自序にある『毛詩鳥獸草木虫魚疏広要』のほか、『毛詩注疏』、朱熹『詩集伝』、『爾雅注疏』といった経書の注釈書、『詩経』動植物の注釈書である江村如圭『詩経名物弁解』（一七三一年刊）、図解百科全書である寺島良安『和漢三才図会』（一七二二年頃刊）、明の李時珍『本草綱目』や貝原益軒『大和本草』（一七〇九年刊）等の本草書を

参照したことがわかる。実際、『陸氏鳥獸草木虫魚疏図』の図の多くは、『三才図会』、「詩経大全図」、『和漢三才図会』、『本草綱目』や『大和本草』の附録図と同様か、類似している。このほか、「雉鳩図」のように上記の諸書には見えず、清の徐鼎『毛詩名物図説』（一七七一年刊）を引き写したらしき図がある。これは、日本で『毛詩名物図説』が翻刻された文化五年（一八〇八）以前に同書の影響を示した早期の例である¹⁶。

4. 『毛詩品物図攷』

『毛詩品物図攷』七卷、岡元鳳の撰¹⁷。本書は刻本であり、巻首には那波師曾（魯堂）と柴邦彦（柴野栗山）の序、及び天明四年（一七八四）の自序、巻末には木孔恭（木村兼葭堂）の序と須原屋茂兵衛、堺屋新兵衛等、江戸、大坂の書肆及び刻工を記した刊記がある。著者の岡元鳳（一七三七～一七八七）は字を公翼、号を魯庵といい、大坂の人である。医術を生業とし、物産学を好み、著作に『離騷名物攷』や『香橙窩集』があった¹⁸。

『毛詩品物図攷』は『詩経』に見える動植物を草、木、鳥、獸、虫、魚の六種に分けて計二二四の動植物図を列挙しており、諸書の記載と考証、和名を附している。木村兼葭堂の序によると、稲生若水が「多識之学」を提唱して『詩経小識』を編纂した後、その学燈を継いだ人々は『詩経』名物に関する書物を著したが、図解本はなかった。そこで、岡元鳳は自ら観察した日本各地の動植物の情報や文献考証の結果を一書にまとめ、大坂の絵師橋国雄に図を描かせたという。また自序には、近世の儒者がすでに『詩経』の名物を考証しているので、図を附した『毛詩品物図攷』を編纂して児童でも容易に理解できるよう意図したことや、編纂にあたって毛氏、鄭玄、朱熹の『詩経』注釈を主として参照し、その間に異同があれば折中したことが記されている¹⁹。

『毛詩品物図攷』の引用文献には、自序に言及された毛氏、鄭玄、朱熹の注釈のほか、宋の呂祖謙『呂氏家塾読詩記』や嚴粲『詩緝』、明の勅撰『詩経大全』、顧夢麟『詩経説約』等の経書、宋の陸佃『埤雅』や明の方以智『通雅』等の字書、明の李時珍『本草綱目』や王象晋『二如亭群芳譜』等の本草書や画譜、明の馮復京『六家詩名物疏』や毛晋『毛詩鳥獸草木虫魚疏広要』、稲生若水『詩経小識』、江村如圭『詩経名物弁解』といった日中の『詩経』名物注釈書が見える。

一方、図の多くには出典が示されていない。一部に『和漢三才図会』と類似した図があり同書を参考したと推測されるが、大部分は他書に見えず、実物をもとに描いた可能性がある。唯一出典が明らかなのは「鼃図」である。「鼃図」の注には平賀源内『物類品隲』（一七六三年刊）が引用されており、図も『物類品隲』の「蛮産鼃図」を引き写したものである。なお、「蛮産鼃図」は平賀源内の師である田村藍水が長崎で入手した、舶来のワニ標本の図である。

5. 『詩経図彙』

『詩経図彙』は『五経図彙』中の一巻、松本愚山の撰。本書は刻本であり、巻首には左兵衛督平信庸（西洞院信庸）の序、巻末には「天明五年乙巳（一七八五）五月官准、寛政三年辛亥（一七九一）発行」の一文及び刻工、書肆を列挙した刊記がある²⁰。松本愚山（一七五四頃～一八三四）は名を慎、字を幼憲、或いは君厚といい京都の人、皆川淇園に学び、後に儒学を業とした。著書には『閩史約書』、『周易箋注』、『論語箋注』、『孝経箋注』、『菅家寔録』、『続欧蘇手簡』、『訳文須知』等がある²¹。

『詩経図彙』は楽器、祭器、衣冠、兵器、生活用具、地理天文等の図や「三経（風雅頌）」「三緯（賦比興）」の正変、幽風の「七月」詩の譜、計一一七図を収録している。同書の「凡例」によると、松本愚山は清の乾隆五年（一七四〇）、王疇が南宋の『六経図』を校訂し編纂した『六経図定本』を底本とし、『欽定四経』や『五経大全』の図譜（『詩経』については『欽定詩経伝説彙纂』の「詩伝図」や『詩経大全』の「詩経大全図」）等に依拠して校訂し、さらに明の王圻『三才図会』といった書物から図を補うことで『詩経図彙』を編纂したという²²。多くの図は上記諸書と同じものだが、なかには『詩経』の意に適うよう独自に器物の装飾を改めたり、恐らくより適切と判断された図を選択していたりする²³。

『詩経図彙』の編纂以前、日本で祭器や衣冠といった『詩経』の器物を図示した書物は、新井白石『詩経図』と尾田玄古『詩経図解』のみであった。前者は貴人の経筵のために編纂されたことから一般に流通しなかつただろうし、後者は初学者向けのテキストである上、その図は他書からの引き写しであった。『詩経図彙』は既成の書物に拠ったとはいえ、日本において『詩経』の器物を専門的に考証し、広く流通したほぼ初めての書物である。

6. 『詩経名物図』

『詩経名物図』上下二冊、田辺楽斎の撰。本書は稿本であり、巻首に寛政六年（一七九四）の自序と、旧蔵者である仙台藩医飯川勤が抄写した凡例がある²⁴。田辺楽斎（一七五四～一八二三）、本姓は野中、名を匡敕、字を子順といい仙台の人、仙台藩儒田辺晋斎、東里父子を師として田辺姓を称した。京都や江戸に遊学した後、仙台に帰り藩校養賢堂の学頭や侍講を歴任した。著書には『五経筆解』、『四書筆解』、『家礼筆解』、『近思録筆解』、『投壺図解』、『堂室考』、『深衣考』、『族葬例』等がある²⁵。

『詩経名物図』は『詩経』篇章の順に従い天文、地形、衣冠、車駕、祭器等の一二一図を収録しており、大部分の図には諸書から採録した注釈と、著者の注記が附されている。凡例によると、田辺楽斎は編纂に際して、『詩経』の古注と新注のどちらか一方を偏重することはせず、理に適うと判断した方に従い、是非の判断が難しい場合は各々の説に基

づき図を示したほか、宋の聶崇義『三礼図』にある図は重ねて示さず、『三礼図』のうち経書の記載に合致しない図は改めたという²⁶。実際の内容を見ると、『詩経名物図』の注釈は『毛詩』や三礼、『春秋』等の漢唐注疏のほか、陳暘、朱熹、呂祖謙、李栲、易祓、許謙、丘濬、柯尚遷、顧夢麟、方廷珪など、宋から清までの諸儒の説、『文選』や黄公紹『古今韻会』、楊慎『丹鉛総録』といった諸書の記載を広く引用している。これに対して、図は「佩玉図」と「犧尊図」に『宣和博古図』を参照したとある以外、出典を示していない。主として凡例に見える『三礼図』に依拠したようだが、「罍図」は松本愚山『詩経図彙』と同じく沈括『夢溪筆談』の記載を根拠として描かれた図であり、『詩経図彙』を参照した可能性がある。また、「州図」、「射隰図」、「稗穡図」、「陶復図」、「澗図」等、他書に見えず田辺楽斎が独自に作成したらしき図も散見される。

一方、自序や凡例には、『詩経』に記された動植物の種類が多く、風土、時代が異なり明らかにし難いため図を作成できなかった、とある。現存する田辺楽斎の著作には動植物を取り上げたものがほとんどなく、むしろ礼制に関する考証が多い。恐らく田辺楽斎は礼学に傾注しており、動植物の考証は得意としなかったか、そもそも学問として重視していなかったのかもしれない。

7. 『詩経名物図解』

『詩経名物図解』十冊、細井東陽の撰。本書は稿本であり、巻首には嘉永元年（一八四八）松堂清裕の序と弘化四年（一八四七）の自序及び凡例、巻末には嘉永四年（一八五一）花木鴻の序と「嘉永庚戌夏五月、越藩細井徇撰」の識語がある²⁷。細井東陽は名を徇（または洵、順）、字を叔達、号を東陽といい、本草学者として著名な小野蘭山（一七二九～一八一〇）に学んだ後、京都や大坂で学問を講じた。後に越前福井藩の医官となり、致仕後は著述活動に没頭したという。著書には『四診備要』、『本草精義』、『経験医話』等がある²⁸。

『詩経名物図解』は動植物を描いた二四四図を収録しており、動植物の異名と和名、諸書から採録した注釈と著者の注記が附されている。同書の凡例によると、図示した動植物の大部分は細井東陽が自ら観察しており、日本に棲息していないものはその師や友人、古人の描いた図を相互に参照したこと、注釈は主に朱熹の注に従い、理に適わぬ点があれば他説を参照したことが記されている²⁹。また、自序に記された編纂意図には、清の徐鼎『毛詩名物図説』が『詩経』の動植物をよく考証し図を示したのに対して、日本では稻生若水や新井白石、貝原益軒、松岡如庵、人見必大、江村如圭、小野蘭山等の学者が動植物を考証しながら図を作成しなかったこと、そして自身が唯一見るに至った岡元鳳『毛詩名物図攷』の図に不足を感じたことから、『詩経名物図解』の編纂を思い立ったと記されて

いる³⁰。

凡例や自序から、細井東陽が主に『毛詩名物図説』と『毛詩品物図攷』に依拠し、稲生若水や貝原益軒など諸家の説を考証の資としたことは明らかである。しかし、『詩経名物図解』を通覧すると、細井東陽は他にも相当量の書物を参照したようで、引用出典として日中の様々な分野の書物が挙げられている。特に顕著なのは『郷薬本草』や『医学彙函』等の本草書や医書、そして『南寧府志』や『農桑輯要』といった地方志や農書が多く見られる点である。これらの書物を多く参照したのは、細井東陽が医師であり、さらに小野蘭山から学んだ本草学や物産学の観点から『詩経』の動植物に関心を向けたからだろう³¹。実際、『詩経名物図解』の注釈や著者の注記には、『詩経』の解釈よりも動植物の産地、日本への伝来、用途や薬効に言及した箇所が多く見られる。

一方、図の多くは、凡例にあるように細井東陽が自ら動植物を観察して作成したようで典拠が記されていない。それ以外の一部の図は、理に合っていると判断した他書の図をそのまま引き写しており、「加賀藩の友人から取り寄せた図」（檀図）や「小野蘭山秘蔵の晋の宗（宋）参百鳥図式中の図」（雉鳩図）のように、逐一典拠を示している。また、異説が多く実態が不明なもの、龍や鳳凰のように実在が不明なものは敢えて図を作成していない。このように、細井東陽の編纂姿勢は、医師・本草学者として、相当実証的なものであったと考えられる。

8. 『詩経物産図譜』

筆者は未見。岩佐伸一氏が本書の内容を紹介、考察しているので、以下では同氏の論考により概要を記す³²。

『詩経物産図譜』五冊、馬場克昌の撰、現在は馬場家菩提寺の天猷寺に所蔵されている。馬場克昌（一七八五～一八六八）は美濃国土岐郡釜戸村等二千石を領した旗本である。江戸時代後期に大名、旗本を中心に結成された本草、博物学の研究会「楮鞭会」に参加し、同会の同人とともに『秦皮図説』、『ホトトギス図説』等を完成させるとともに、自身も『群英譜』、『群英類聚図譜』、『資生圃草木未詳品図説』等、動植物の考証書や図譜を編纂した。

『詩経物産図譜』は動植物の彩色図約二五〇図を収録しており、図には和名や諸書の記載、著者の注記等を附している。岩佐氏は、本書の構成や引用文献が岡元鳳『毛詩品物図攷』と類似していることから、『毛詩品物図攷』を下敷きにして編纂された可能性がある」と指摘している。また、『詩経物産図譜』の注釈は馬場克昌と同時代に活動した桂川国瑞、栗本丹州等の説を含む、字書や地方志、本草書、医書といった日中の書籍を引用しており³³、図は馬場克昌が実見し描いたであろうもののほか、桂川国瑞が賛を記した「麒麟

図」や高木春山『本草図説』と同様のものが収録されているという。

9. 『鼈頭図彙標註詩経字類大全』

『鼈頭図彙標註詩経字類大全』は『鼈頭図彙標註五経字類大全』中の一巻、佐野元恭の撰。本書は銅版印本であり、巻首には自序、「翰林院署図」及び凡例、巻末には明治十六年（一八八三）二月の刊記がある³⁴。自序には、初学者の学習に供するため本書を編纂した旨が記されている³⁵。本書は上図下文の体裁をとっており、『詩経』本文と和文の注の上部に語彙と字音の注、及び動植物や天文、器物等の七十一図が列挙されているほか、「幽風・七月」詩の間に「幽公七月風化図」がある。本書の収録する器物図は松本愚山『詩経図彙』と、動植物図は岡元鳳『毛詩品物図攷』と全く同じものである。

佐野元恭については、刊記に「和歌山県士族」とあるほか、明治時代初頭に編纂した『女心得草』、『三體作文自在』、『鼈頭插画一新農家往来』、『鼈頭插画一新商家往来』、『四書字引大全』といった作文、往来物の教科書や字書が伝わっている。編者は明治になり俸禄を失った後、自らの教養をもとに童蒙書の編纂を生業としたのだろう。

10. 『標註図彙詩経字解大全』

『標註図彙詩経字解大全』は『標註図彙五経字解大全』中の一巻、三尾重定の撰。本書も銅版印本であり、巻首には三条実美の書と賢人図、自序及び緒言、巻末には明治十九年（一八八六）一月の刊記がある³⁶。自序によると、三尾重定は塾で経書を教える際、難解な句に釈義を加えており、書き溜めた釈義を見た書肆が出版を勧めたという³⁷。本書は先の『鼈頭図彙標註詩経字類大全』と同じく上図下文の体裁であり、『詩経』本文と和文の注の上部に字音や他書の注解、そして動植物と情景を描いた二十二図を列挙している。三尾重定については、彼が編纂した『改進用文』の刊記に「愛知県士族」とあり、明治時代の初、中期には『和漢作文大成』、『小学必攜開化農商用文』、『開化小学掌中漢語用文』、『明治普通文証』、『明治女用文』、『祝辞演説五千題』といった作文の教科書を編纂している。三尾重定の経歴や編纂目的は先述した佐野元恭とよく似ている。

『詩経』の情景図を収録する書物は、中国でも康熙末年に高儕鶴が編纂した『詩経図譜慧解』の手稿本や、清末に上海錦章書局が刊行した石印本『絵図監本詩経』等、僅かしか見られない。日本では、『標註図彙詩経字解大全』がほぼ初めてのものである。

11. 『詩経小戎図考』

『詩経小戎図考』一巻、釈仏誉の撰。釈仏誉の経歴は不明。木村兼葭堂の鈔本が伝わるが、原本の所在は明らかでない³⁸。本書は『詩経』秦風の「小戎」詩にある小戎（兵車）

の寸法や部品、彩色等に関する記載を『毛詩注疏』や朱熹『詩集伝』、『周礼注疏』、『正字通』等から輯録して著者の注記を加えており、「小戎図」、「輿輶図」、「楊轂之図」、「介馬細見之図」の四図を附している。この四図は、中国の「図譜」や『三才図会』に類似の図があることから、編者はこれらの図と諸書の記載とを比較して考証を試みたと推測される。

12. 『詩経国風図』と『詩経小雅図』

『詩経国風図』と『詩経小雅図』各一卷、ともに稿本、皆川淇園の撰³⁹。皆川淇園（一七三五～一八〇七）は名を愿、字を伯恭といい、京都の人である。その学問は文字の音と義を重視しており、字音と『易経』の理論を研究した結果から「開物学」を發明して、「名」と「物」の関係性を探究した。著書には『易学開物』、『虚字解』、『淇園釋解』、『欧蘇文弾』、『問学拳要』等がある⁴⁰。

『詩経国風図』は邶風から豳風までの十四風の詩一三四篇に関する図を、『詩経小雅図』は鹿鳴之什から都人士之什までの詩七十篇に関する図を収録している⁴¹。両書の図は各詩篇の構造を示しているらしい。例えば「柏舟図」では、邶風の「柏舟」詩の句「耿耿不寢、如有隱憂。微有無酒、以敖以遊」を分解し、右下の方形中に詠人の心を「憂」と記し、ここから派生した詠人の心を「心出入無方」、形を「敖遊」、礼を「有酒」と図示している。このように、皆川淇園は各詩篇における情景描写等の表層と、心理描写等の深層の関係性を示そうとしたと考えられる。ただし、なかには相当複雑な図もあり、両書における皆川淇園の『詩経』解釈を明らかにするにはさらなる検討を要する。

13. 『小戎図攷』

『小戎図攷』は稿本『車輿図考』の附録、安積良斎の撰⁴²。安積良斎（一七九一～一八六一）は字を思順といい陸奥郡山の人。佐藤一斎や林述斎に学んだ後、江戸で私塾を開き、さらに二本松藩の藩校や昌平黌の教授を務めた。著書には『朱学管窺』、『論語埤註』、『論孟衍旨』、『洋外紀略』等がある⁴³。

『車輿図考』巻首の自序には、宋の聶崇義『三礼図』や洪井孝徳『雜図』の車制図に不足や誤りが多いため、『周官義疏』によって校訂したとある⁴⁴。自序の書眉に聶崇義『三礼図』を批判する錢牧斎（錢謙益）の見解を記していることから、その影響を受けて編纂したのかもしれない⁴⁵。また、『小戎図攷』の序によると、藤山某が所蔵していた中井竹山『小戎図』には疑義が少なからず存在するものの、ひとまず参考として収録したという⁴⁶。『小戎図攷』の図は、南宋の『六経図』以来、中国の「図譜」によく見られるものである。

14. 『詩経図説』

『詩経図説』十六軸、編者不詳の卷子本である⁴⁷。本書は図の典拠として松本愚山『五経図彙』を示しており、同書が刊行された一七九一年以降に編纂されたようである。『詩経図説』は天文、動植物、楽器、祭器、兵器、農具、建築等の彩色図二五六図を収録しており、図には和名、『詩経』の小序と本文、そして諸家の注釈が附されている。注釈は毛伝、鄭箋、朱熹注を主として、『周礼』や『礼記』、「刪補」や「衍義」を輯録している⁴⁸。一方、図には『五経図彙』以外の典拠が記されていない。器物や建築等の図では、『五経図彙』のほか、「筍図」のように『和漢三才図会』に類似した図があり、植物図は岡元鳳『毛詩品物図攷』に類似した図が散見される。ただし、器物図と植物図ともに典拠不明の図もあるため、これらを編者が独自に作成したのかどうか、さらに他の図解本と比較する必要がある。

15. 『詩経虫図説』

『詩経虫図説』一卷、編者不詳⁴⁹。本書は稿本であり、『詩経』に見える虫類二十九種の彩色図を収録している。書中、『毛詩注疏』や朱熹『詩集伝』、陸佃『埤雅』、鄭樵『通志略』、羅願『爾雅翼』、陳蔵器『本草拾遺』、王圻『三才図会』、田藝衡『留青日札』、馮復京『六家詩名物疏』、陳仁錫『潜確類書』といった中国の書物、及び小野蘭山『詩経名物弁解正誤』（一八一〇年）、井岡元泉『毛詩名物質疑』、栗本丹洲『千虫譜』（一八一一年）等、日本人の著作に基づいた編者の見解が記されている。これらの引用文献から、『詩経虫図説』の成立年代は一八一一年以後のことである。

書中の図は、『千虫譜』と類似したものが多い。ただし、稻生若水が「不詳」としていた「蜮」について、井岡元泉『毛詩名物質疑』に記された説に従い、越後高田に出没するという「カマイタチ」の図を示す等、独自に作成した可能性のある図も見える。

二、日本『詩経』図譜の特色とその背景

中国では、西晋または唐代に著されたとされる『陸氏鳥獸草木虫魚疏』以降、蔡卞『毛詩名物解』、陳大章『詩経名物集覧』、馮復京『六家詩名物疏』といった『詩経』動植物の考証書が古くより著された。しかし、「図譜」といえば、唐の大和・開成年間（八二七～八四〇）に『毛詩草木虫魚図』（すでに散佚）が編纂されてから中華民国初期に至るまでの間、中国で編纂されたのは清の徐鼎『毛詩名物図解』（一七七一年刊）のみであった。

一方、先に整理した日本の「図譜」の概要から明らかなように、日本では江戸時代初期から明治時代初期までの約二百年間、動植物図を主体とする「図譜」が複数編纂された。中国に比べて動植物図が多く収録されたことは、日本の「図譜」の顕著な特色である。

動植物図を収録する「図譜」には、動植物図とそれ以外の図をとともに収録する四種(1. 新井白石・稲生若水『詩経図』、2. 尾田玄古『頭書図解改正詩経』、3. 淵在寛『陸氏鳥獸草木虫魚疏図』、9. 佐野元恭『鼈頭図彙標註詩経字類大全』)、そして専ら動植物図のみを収録する五種(4. 岡元鳳『毛詩品物図攷』、7. 細井東陽『詩経名物図解』、8. 馬場克昌『詩経物産図譜』、14. 編者不明『詩経図説』、15. 編者不明『詩経虫図説』)がある。

これらの「図譜」の編纂年代と内容には一定の関係性が認められる。江戸時代初期から中期の図譜は1.『詩経図』(一六九四年)、2.『頭書図解改正詩経』(一七一七年)、3.『陸氏鳥獸草木虫魚疏図』(一七七九年)のように動植物とそれ以外の図をとともに収録する「図譜」が多く、時代が下るにつれて4.『毛詩品物図攷』(一七八四年)や7.『詩経名物図解』(一八五〇年)、8.『詩経物産図譜』(一八五七年)など、専ら動植物図を収録する「図譜」が編纂された。また、編者と内容の関係を見ると、専ら動植物図のみを収録する「図譜」の編者は、岡元鳳、細井東陽、馬場克昌といった、医学・本草学の領域で活動した人物であった。これらのことは、儒学とは異なった観点から『詩経』の動植物に関心を抱く人物が「図譜」の編纂に携わることで、動植物の考証に特化した「図譜」が次第に編纂されるようになったことを示している。

その先鞭をつけたのは、稲生若水である。若水自身は「図譜」を編纂しなかったが、1.『詩経図』の編纂に際して著した『詩経小識』は、早期の『詩経』動植物考証書としての後の「図譜」編纂の趨勢に影響を与えた。このことは、岡元鳳『毛詩品物図攷』の木村兼葭堂序に記された「吾日本嘗有稻若水先生者、自唱多識之學、始有小識之撰。其徒相續有纂述」という一文によく示されている。そもそも、『詩経』動植物の考証書『詩経物産考』を著した松岡恕庵は稲生若水の門人であり、『詩経名物弁解』を著した江村如圭、そして『詩経名物弁解正誤』を著し徐鼎『毛詩名物図説』の翻刻書に和名を附した小野蘭山は、ともに松岡恕庵の門人である。さらに、小野蘭山の門下からは7.『詩経名物図解』の編者細井東陽や、16.『詩経虫図説』に引用されている『毛詩名物質疑』の著者井岡元泉が出た。稲生若水の学問の系譜に連なる人々が各々『詩経』動植物の考証書を編纂したことは、『詩経』動植物図の編纂を推進した大きな要因であったと考えてよいだろう。

一方、動植物以外の図を含む1.『詩経図』や2.『頭書図解改正詩経』、5.『詩経図彙』、6.『詩経名物図』9.『鼈頭図彙標註詩経字類大全』、10.『標註図彙詩経字解大全』、12.『詩経国風図』・『詩経小雅図』、13.『小戎図考』の編者は、新井白石のように儒学を主たる学問としたか、尾田玄古のように教育のため童蒙書を多く編纂した人々である。この点は、中国の「図譜」の編纂者とさほど変わらない。しかし、彼らが編纂した「図譜」は、中国の「図譜」の内容をそのまま踏襲したわけではない。器物図について言えば『宣和博古図』や『三才図会』、『訓蒙図彙』といった、中国の「図譜」にはほとんど取り入れられること

のなかった書物を参照することで、あるいは12.『詩経国風図』・『詩経小雅図』の編者皆川淇園のように独自の方法により『詩経』の解釈を試みることで、新たな「図譜」を作り上げたのである。

三、おわりに

本稿では、日本の「図譜」の全容を俯瞰することを優先した。このため、先に指摘した特色はあくまで表層的なものである。特色の核心にせまるには、「図譜」の考証内容とともに、儒学と他の領域との関連性について検討する必要がある。

動植物図について言えば、日本の「図譜」は『詩経』の解釈から乖離し、本草学、物産学、博物学の方向へ発展していった。先に述べた通り、その基礎を築いたのは稲生若水である。しかし、現状では、そもそも稲生若水の学問とその背景に関する研究がほとんど行われていない。また、稲生若水の学問の系譜に連なり『詩経』の動植物を考証した松岡恕庵や小野蘭山などの人々については、本草学や博物学の観点から研究が行われているものの、彼らが儒学の經典である『詩経』の動植物に関心を寄せ考証を行った意図、即ち本草学や博物学と儒学との関わりについて、十分に検討されたとは言い難い⁵⁰。稲生若水の『詩経』動植物考証がどのように形作られ受け継がれていったのか、この問題は日本の「図譜」の特色を検討する上で明らかにするべき問題であろう。

動植物以外の図の特色については、中国における『詩経』名物考証との関連性に注目する必要がある。例えば、寛政三年（一七九一）に刊刻された5.『詩経図彙』のように、南宋の『六経図』を他書によって校訂した「図譜」は、中国でも康熙年間（一六六二～一七二二）の末年から乾隆年間（一七三六～一七九五）にかけて複数編纂された。ほぼ同時期に、日中ともに類似した編纂方法による「図譜」が編纂されたのである。また、11.『詩経小戎図考』や13.『小戎図攷』が日本で編纂された時期、中国でも錢坫『車制攷』、戴震『考工記図』、阮元『考工記車制図解』といった車制図が編纂された。このように、動植物以外の図の特色は、清代考証学の影響を視野にいれて検討する必要があるだろう。

注

- 1 「図」は事物の形状や配置を描いた絵、「譜」は詩篇名や人名等を整理した一覧表である。日中の『詩経』図譜は、概ね「図」と「譜」のどちらか一方、または両者をともに収録している。本論では、これらを総じて「図譜」と称した。
- 2 国立公文書館内閣文庫蔵本（275 - 0252）によった。

- 3 『詩経』の図譜を含む「六経図」については、汪前進「石刻『六経図』綜考」（中国科学院自然科学史研究所編『自然科学史研究』一九九三年四月）が元代の「六経図碑」を取り上げて以降、「六経図碑」や南宋の『六経図』に関する論考が行われている。これらの論考は主に『六経図』全体の内容や伝来を対象としており、『詩経』との関係には言及していない。また、『詩経』の図譜を対象とした論考では、薛景の「『詩経』図学思想研究」（修士論文、貴州大学、二〇〇八年）や「『詩経』図学概況及研究意義」（畢節学院編『畢節学院学報』二〇一一年一月）が歴代の『詩経』動植物図や地理図の沿革と変遷、『詩経』図譜の資料的価値を指摘している。その後、汪璐「歴代図説『詩経』文献概況」（四川大学国際儒学研究院編『儒蔵論壇』二〇一二年十二月）、李傑栄「漢至唐代的詩経図」（河北師範大学編『河北師範大学学报』哲学社会科学版、二〇一三年一月）、張玖青・曹建国「唐前『詩経』図考論」（中国芸術研究院編『文芸研究』二〇一三年三月）の三篇は、『詩経』図譜の概要を紹介するにとどまり、内容や図譜相互の関連性には言及していない。以上のほか、南宋の画家馬和之が描いた「詩経図」等、『詩経』の情景を描いた絵画に関する論考も複数存在する。これらは主に芸術の観点から考察しており、『詩経』の解釈にはほとんど言及していない。
- 4 以下、本稿で記した中国の「図譜」の概要や特色は、筆者が博士論文「『詩経』図譜の基礎的研究—図譜の継承と展開—」（早稲田大学リポジトリ：https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=40407&item_no=1&page_id=13&block_id=21）において考察した結果である。
- 5 日本において編纂された『詩経』図譜を紹介したものには、村山吉廣「詩経関係書目解題（二）—新井白石校・狩野春湖筆「詩経図」について—」（日本詩経学会『詩経研究』六号、一九八一年）や岩佐伸一「馬場克昌『詩経物産図譜』について」（『岐阜県博物館調査研究報告』第二号、一九九九年）がある。その後、岡元鳳『毛詩品物図攷』が中国で影印されて広く知られるようになったほか、同書が清代に翻刻されたことが注目され、近年では肖嬌嬌「日本江戸時代岡元鳳『毛詩品物図考』的傳播」（四川大学中国俗文化研究所『新国学』二〇一四年十月）、莊雅州「“毛詩名物図説”与“毛詩品物図考”異同論」（中国詩経学会『詩経研究叢刊』二〇一五年十一月）、陳捷「『毛詩品物図考』与中日書籍交流」（天津師範大学『国際中国文学研究叢刊』二〇一六年九月）、陳捷「『毛詩品物図考』より見た18世紀における新しい「知」の形成」（川原秀城編『西学東漸と東アジア』、岩波書店、二〇一五年）等、『毛詩品物図攷』の流伝や「図譜」相互の比較に関する論考が多い。また、これまでほとんど取り上げられなかった淵在寛『陸氏鳥獸草木虫魚疏図』については、『毛詩草木鳥獸虫

魚疏』の伝来と同書の日中両国における受容の観点から、矢島明希子氏が「日本における『毛詩草木鳥獸虫魚疏』の出版：和刻本と図解本」（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫『斯道文庫論集』五十二号、二〇一七年）の中で、その内容と特徴を詳細に考察している。以上のほかにも、王暁平氏が『日本詩経学史』（学苑出版者、二〇〇九年）一三五～一三九頁や『日本詩経学文献考釈』（中華書局、二〇一二年）四三七～四四二頁において、新井白石『詩経図』、淵在寛『陸氏鳥獸草木虫魚疏図』、岡元鳳『毛詩品物図攷』、細井東陽『詩経名物図解』の四種を紹介している。

- 6 三重県立図書館土井文庫蔵本（／499.9／オ／1）によった。
- 7 表に示した「図譜」のほかにも、佐久間熊水『詩経図考』、船橋師賢『詩経図略』、編者不明『詩経衣裳之図』の三種がある。『詩経図考』は関儀一郎等編『近世漢学者著述目録大成』（一九四一年、東洋図書刊行会）に見えるが所在、内容ともに不明なため、本稿では省いた。また、『詩経図略』（京都大学図書館蔵）は明代の「詩経大全図」を節録した稿本、『詩経衣裳之図』（宮内庁書陵部蔵）は明の「書経大全図」（『書経大全』の附録）中の「九罍袞衣」「九罍繡裳」「虞書十二章服之圖」三図と関連する経書の記載、編者の注記を記した紙片である。前者は独自の見解に基づき編纂されたと言い難いため、後者は書物でないことから同様に省いた。
- 8 宮内庁書陵部蔵本（450-7）を参照した。また、早稲田大学中央図書館には新井白石の自筆稿本とされる『詩経図総目』（ロ12-01116）が所蔵されており、合わせて参照した。
- 9 『元治増補御書物目録』影印本（小川武彦、金井康編『徳川幕府蔵書目』第七巻、1985年、ゆまに書房）によった。
- 10 東京大学史料編纂所編『新井白石日記』上下（一九五二年、岩波書店）の元禄六年正月から元禄八年十二月まで（一～五十三頁）および国書刊行会編『新井白石全集』第五冊の「白石先生手簡」（一九七七年、国書刊行会、一四〇～五七〇頁）を参照した。
- 11 『詩経図』編纂の詳細について、筆者は「新井白石『詩経図』について－その編纂経緯と名物考証」（早稲田大学中国古籍文化研究所編『中国古籍文化研究－稲畑耕一郎先生退休記念論集』上巻189-201頁、東方書店、二〇一八年）にまとめた。
- 12 東北大学図書館狩野文庫蔵本（2-1648-11）を参照した。
- 13 尾田玄古の経歴や著述活動は長友千代治「近世における通俗軍書の流行と馬場信武、馬場信意」（『愛知県立大学説林』二十五、一九七六年）を参照した。
- 14 『詩経動植物図譜鑑叢書』影印本（一九七七年、大化書局）及び国会図書館（特1-203、白井光太郎旧蔵本）と三重県立図書館土井文庫（031-フ）の各蔵本を参照した。

- 15 自序には「本邦之學者、於品物則或置而不論也…余朽木之質、寡聞孤陋。雖未精事實物產、然畀之久也矣。竊取唐陸璣之詩疏而加焉、以明毛晉之說附焉、以諸本草註之、以圖畫國字鮮之、聊爲童蒙塞求耳矣」とある。
- 16 『陸氏鳥獸草木虫魚疏図』の概要については、本稿注4に挙げた矢島明希子「日本における『毛詩草木鳥獸虫魚疏』の出版：和刻本と図解本」を参照した。
- 17 『詩経動植物図譜鑑叢書』影印本及び国会図書館（123.3-O417m-O）、三重県立図書館土井文庫（499.9-オ-1）等の各蔵本を参照した。
- 18 竹岡友三『医家人名辞書』（一九三一年、似玉堂）を参照した。
- 19 木村兼葭堂序の原文には「…吾日本嘗有稻若水先生者、自唱多識之學、始有小識之撰。其徒相續有纂述、未見圖畫其形狀者也。友人岡公翼有慨于茲、說詩之暇、遍索五方、親詳名物、使畫人橘國雄寫其圖」、自序の原文には「近世一二儒先稱首及之、辨殆匡正。余便纂斯編以便幼學固則一覽易曉、不要末說相軋。毛鄭朱三家爲歸、有異同者、會粹群書而折之」とある。
- 20 早稲田中央図書館蔵本（ロ 12-03025）と明治十六年補刻本影印（一九七四年、中文出版社）を参照した。
- 21 樋口徳翁編『日本名家人名詳伝』（優美館、一八九四年）、村松志孝編『近世儒家人物誌』（金桜堂、一九一四年）、小川貫道編『漢学者伝記及著述集覧』（関書院、一九三五年）を参照した。
- 22 「凡例」第一条には「是編以清人王皎（皜）所刻揚（楊）氏六經圖爲藍本、參用明永樂編脩大全、清康熙欽定四經所收圖及三才圖會等。唯憾珍編奇書弗能合較也。大略摘要芟繁比諸舊圖、比諸舊圖十存七八、其補入者裁二三耳。然亦各有憑據、不敢私臆爲之圖、庶乎無杜撰之失」とある。
- 23 例えば「罍図」では、従来の『詩経』や三礼の図にある罍の裝飾が雷公を描くのは誤りとして、宋の沈括『夢溪筆談』の記述により雷紋を加えている。また、「鬻図」や「琫図」は『六経図定本』の図ではなく、宋の『宣和博古図』や『考古図』の図を示している。
- 24 本稿では宮城県図書館小西文庫蔵本（KN123-シ2）を参照した。凡例の後にある飯川勤の跋には「右在岡梧溪蔵卷、而卷末文化八年某月日澀谷順安贍寫云云。以余考之、順安乃田邊樂齋先生門生歟。又考此本例文、出于先生追撰歟。明治丁酉春日飯川勤識」とある。
- 25 『近世儒家人物誌』と松崎慊堂『田辺樂齋先生之碑』（宮城県史編纂委員会編『宮城県史』十七「金石志」、一九五六年）を参照した。筆者の調査によれば、田辺樂齋の著作は六十種ほど伝存しており、その多くは宮城県図書館小西文庫に所蔵されている。

- 26 凡例の第一条には「詩有新古二註。此編所圖、不專主新、不專主古。於二註中不易解者、亦併圖之、以示異同」、第二条には「詩言該博、物其多矣。今舉大略細焉、不一々圖之。筐筥、錡釜、籩豆、簠簋之屬、阮諶三禮圖出之者、不贅於三禮圖中。或与經不合者、今改圖之」とある。ここに見える阮諶『三礼図』は早くに散佚している。田辺楽斎が依拠したのは阮諶『三礼図』をもとに編纂された宋の聶崇義『三礼図』であろう。同図は清代まで翻刻され、日本でも宝暦十一年（一七六一）に翻刻された。
- 27 国会図書館蔵本（寄別 10-8）を参照した。
- 28 『詩経名物図解』や『四診備要』（国会図書館蔵本特 1-815）の諸家の序を参照した。
- 29 凡例の第三条には「此図多く即予の目撃する所にして其内目撃を得ざる物また本邦に詳ならつして唐山に産出する物ハ或ハ舶来の物により或は師友の図し得る所を得て古人之図式と相参考するもの其間一毫も己の言想を加えず」、第五条には「図解は全く朱子之註に依て其間穩ならざるあれハ他説と相参考す其餘古人諸説之得失あると皆愚按の両字を加て己か意を用敢て以僭偷す」とある。
- 30 自序には「…清徐雪（樵）毛詩圖説詳審有所可據。而本邦論名物有若稻若水、新白石、貝原篤信、松岡玄達如菴、野必大、江希南、小野蘭山翁等之先輩、然恨有其説而無其圖。惟有岡公翼者著品物圖考、然於其形狀有未能不慊然者也。於是乎、予欲成一書以問乎世久矣」とある。
- 31 『詩経名物図解』の「馬図」注釈には「予医ニノ儒学ノ徑（經）解ニウトク況馬ノ事ハ猶サラナリ相馬毛色ノ事ハ本邦大坪神道八丈諸流ノ馬師二悉問ノ知ルヘシ」とあることから、細井東陽は『詩経』自体の解釈にあまり関心を抱かなかつたらしい。
- 32 本稿注4に挙げた岩佐伸一「馬場克昌『詩経物産図譜』について」を参照した。
- 33 岩佐氏の報告末尾に掲載の「『詩経物産図譜』細目」には、『詩経物産図譜』所収の各項目に記された動植物の和名、ラテン語名、オランダ語名とともに、引用文献の名称が一覧として示されている。桂川国瑞（一七五一～一八〇九）は幕府奥医師、伝統的な医学や本草学のほか、蘭学にも通じており、ロシアに漂流した大黒屋光太夫等を聴取して『北槎聞略』を編纂した。栗本丹州（一七五六～一八三四）も幕府医官、幕命により医学館で本草を講義し、薬物の鑑定を行った。『千虫譜』や『皇和魚譜』等、動植物の図譜を多く編纂した。両者の伝は竹岡友三『医家人名辞書』を参照した。
- 34 国会図書館蔵本（特 36-511）を参照した。刻工については、首葉の右匡郭外に「大阪中之島宗是町、伊藤聴泉堂銅刻」とある。
- 35 自序には「余就五經集注、摘取其艱澀之句、付之釋義、以授生徒…唯將釋其艱澀不可速了者、以便童稚耳」とある。
- 36 国会図書館蔵本（特 36-510）を参照した。

- 37 自序には「…余毎授句讀於塾輩子弟、採録其難解章句以付釋義、俾子弟記之胸臆有年、遂積爲若干卷。一日書估富生見之、請上梓焉」とある。「富生」は出版者の富田彦次郎のこと、刊記にその名がある。
- 38 早稲田大学中央図書館蔵本（ロ 12-03664）を参照した。
- 39 両書ともに京都大学図書館蔵本（1-63/シ /1 貴、1-63/シ /2 貴）を参照した。
- 40 竹林貫一『漢学者伝記集成』（名著刊行会、一九三九年）、関儀一郎『近世漢学者著述目録大成』（東洋図書刊行会、一九四一年）及び小川貫道『漢学者伝記及著述集覧』（名著刊行会、一九七〇年）を参照した。
- 41 ただし、『詩経国風図』では邶風の「二子乗舟」詩に対応する図がない。また、『詩経小雅図』の「采芑図」は空白であり、「大田図」は「大田多稼」の四文字のみが記されている。このように、両書ともに未完稿である。
- 42 国会図書館蔵本（103-104）を参照した。
- 43 本稿注 38 に挙げた三書を参照した。
- 44 『車輿図考』序には「聶宗儀（崇義）三禮圖所載車制、甚粗不足觀。惟周宦（官）義疏考工記諸說、商確明備、足以曲盡車制。而其圖則粗簡似不用意者。邦人澀井孝徳雜圖所載、頗若明皙、而舛誤脫畧甚多。…故今因周宦義疏、畧爲改訂、以質博雅君子」とある。
- 45 眉注には「錢牧齋云」とある。しかし、眉注と同様の記載は、朱彝尊『經義考』の「聶氏崇義三礼図集注」条に錢陸燾の説として見える。
- 46 『小戎図攷』序には「左所載小戎圖者、係藤山某所藏。言是浪華竹山中井氏所撰也。中井氏世稱碩儒、其著作頗多、而逸史尤行于世。若此圖、亦復明備、足以知小戎大較。然其中可議者不少。觀者以小戎諸說及車輿圖考、參故而商析之、則其紕繆不少者亦可知矣。故今故載之、以俟他日改訂焉」とある。
- 47 西尾市岩瀬文庫蔵本（辰函 2）を参照した。
- 48 書名に「刪補」や「衍義」と冠する『詩経』注釈書は複数存在する。「刪補」と冠する書物には明の楊寿隆『詩経集注刪補』や清の徐奮鵬『詩経刪補便蒙解注』があり、「衍義」と冠する書物には明の王崇慶『詩経衍義』や江環『詩経闡蒙衍義集注』がある。『詩経図説』がどの注釈書を引いたのか、今後改めて調査したい。
- 49 西尾市岩瀬文庫蔵本（32 函 29）を参照した。
- 50 日本の本草学、博物学の諸相と関連する人物をまとめた上野益三『日本博物学史』（平凡社、一九七三年）や杉本つとむ『江戸の博物学者たち』（講談社、二〇〇六年）には、『詩経』の動植物を考証した人物も複数含まれている。また、小野蘭山や松本恕庵の生涯や学術の特徴については、遠藤正治『本草学と洋学：小野蘭山学統の研

究』（思文閣出版、二〇〇三年）や小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会編『小野蘭山』（八坂書房、二〇一〇年）、太田由佳『松本恕庵本草学の研究』（思文閣出版、二〇一二年）に詳しい。しかし、いずれも本草学や博物学と経学との関係にはほとんど言及していない。

※本稿は平成30年度科研費若手研究（B）「日本の『詩経』図解における特色の形成に関する研究」の成果の一部である。